
0チョコ

かみたか さち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

0 チョコ

【Nコード】

N9176Q

【作者名】

かみたか さち

【あらすじ】

明日はバレンタインデー。去年ひとつももらえなかった公志にとっては憂鬱な日。しかも、テニス部でダブルスを組んでいる理人は大量にもらうのだから、おもしろくない。それでも、当日休んだ理人のもとへ、預かったチョコを届けに行った公志は、帰りの駅で幼馴染の未来と出会ってしまう。

5／18 続編として「昨日の空」UP

ため息が、部活後の冷たいテニスコートに漂って消えた。

「あーあ。明日、休もつかなあ」

白いつぶやきに、前を歩いていていた癖のあるショートヘアが振り返った。

「あら。明日来なかったら、公志は友チョコすらもらえないわよ」
くすくす笑う幼馴染に、正木公志は顔をゆがめた。さらに、隣で肩をすくめるダブルスの相棒に、気分は落ち込む。公志はうらめしそうに相棒をにらんだ。

「いいよな、瀬尾は。去年だってんこ盛りだったろう」

ひがみつぽく言う公志に、瀬尾理人（せお・りひと）がさらりと髪を揺らして首をかしげた。

「でも僕、チョコはあまり好きじゃないし」

バレンタインデーの夕日が、ビルの合間に沈もうとしている。高校の正門を出ると、並んで歩く3人の影が凍えるアスファルトの上に伸びた。肩からずれたラケットを担ぎなおし、公志はおもしろくない顔で言った。

「城戸ちゃんから俺がチョコをもらえるなら、喜んで明日登校するんだけどな」

テニス部人気ナンバー・ワンの女子部員を引き合いに出せば、佐倉未来（くら・みく）が、半ばあきれた顔で公志の肘をはたいた。

「城戸さん、瀬尾君目当てでテニス部入ったんだもん。渡すとしたら、瀬尾くんじゃない？」

ふざけるには強すぎる平手に、公志は大きさに肘をさすった。先を歩く瀬尾を意識しながら、未来をにらみつける。

「そういう佐倉だって、瀬尾の活躍に惹かれて入部したろ」

「そりゃ」

未来は、指先で上着の裾をつまんだりひねりあげたりした。

「公志とダブルス組んで引けを取らない新人なんだから。すごいと思うけど？」

未来が指先で服の端を無意識にいじるのは、誤魔化したい何かがあるときの癖だった。幼稚園児時代から続く癖を、公志は見ても見ぬ振りをする。のほほんとした笑顔で、瀬尾が照れくさそうに未来へ顔を傾けた。

「まだまだ、正木君にはかなわないよ。年季が違うからね」

その笑顔がどんなに公志を腹立たしくさせるか、彼は気づいていないだろう。小学生からテニスを始めた公志が、地道な努力の末ようやく手に入れたレギュラーの座を、高校で初めてラケットを握った瀬尾が一年もたたないうちに手に入れ、公志とダブルスを組むことになった。

テニス部名物の美女と野獣ならぬ「王子と野獣」ペアとして、他校テニス部からも一目おかれているが、公志にとっては、まったく嬉しくない結果である。

もっとも、と、公志は並んで歩く瀬尾を横目で盗み見た。

部活柄日に焼けてはいるが、いつ見ても癒される、おっとりとした笑顔。額にかかる、さらさらの髪。コートに立ったときの、緊張した真摯な眼差し。キレのいいサービス。

針金を植えたようなツンツンした地毛の骨太な公志に比べれば、格段に見栄えがするのだろう。女性受けがいいと言うか。

「あー。もお、ユーウツ」

小石を蹴飛ばし、わざとらしく空を仰いで言い放つ公志に、未来はおかしそうに口元をおさえる。

「城戸さんにメールして、明日公志用に友チョコ用意してもらえるように、頼んどこうか？」

「そんな風にしてもらっても、みじめだろ」

「僕、そんなに要らないから、去年みたいに正木君経由のがあったら、もらってくれたらいいよ」

「むかつくっての」

軽口を交わしながら、最寄りの駅にたどり着いた。自動改札に定期券をかざし、瀬尾は、じゃあ、と反対ホームに続く階段へ向かう。後ろ姿を見送ってから、未来が公志の顔を覗き込んだ。

「仕方ないから、駅前の百均で買ってあげようか？」

「オムツ時代からの腐れ縁からもらっても、なあ」

入線した電車からまき起こる寒風に首をすくめ、公志は、にやりと笑った。未来が寒さに赤くなった頬を膨らませる。

「そんなデリカシーのないこと言ってるから、見放されてるんじゃない。ほら、乗るよ」

手荒に公志の袖を引き、未来は乗車口へ大またで向かった。

「っと。放せよ。そっちは女性専用車両だろ！」

夕飯前の空腹を抱え、明日あてられる可能性の高い物理のノートを眺める。教科書の文字を目でなぞる公志の鼻が、ひくりとうごめいた。焦げ臭い。シャープペンを置くと、壁越しに家庭用火災報知器の電子音が響いた。

「お袋!？」

あわてて、台所の母親の元へ走る。

揚げ物をしていた母が、平然と振り返った。

「あら。まだ出来てないわよ」

台所の報知器は、沈黙していた。公志は、それでも鼻を動かした。

「火事っぽかったけど」

壁伝いに音が、と付け加えると、母の顔色が変わった。

「お隣、見えてきてあげて」

「あ、そうか」

「早く。私、手が放せないから」

母の高い声を後に、公志はサンダルをつっかけてマンションの扉を開けた。走るまでもなく数歩踏み出しただけの隣家、佐倉家のインターホンを押し、ドアに耳を押し当てた。鳴っていた警報音が止まり、換気扇が回る音がする。だめもとでドアノブをまわすと、予

想外にすんなり開いた。

「佐倉！」

玄関に駆け込むと、あわてた素振りでも未来が台所との境の扉を開けて顔を見せた。もあ、と、苦い匂いが立ち込める。思わず、公志はむせて咳き込んだ。

「また、派手に失敗したんだろ」

「ごめん、ごめん。警報鳴っちゃったね」

似合わないエプロンの端をつまみ、未来は、ずれたスリッパを履きなおした。公志は、露骨に顔をしかめる。

「おぼちゃん入院中なのに、ちゃんと食うものあるのか？」

「あ、うん。大丈夫だよ。お父さんは今日、夜勤だし。私一人分くらい、どうにでもなるから」

へらへらと笑う未来に、公志は口をへの字に曲げて頭をかく。一見家庭的な印象の未来がひどい料理オンチだと知っているのは、昔から家族ぐるみで付き合いのある、公志たち正木家の人間くらいだろう。

「なんだったら、うちに来るか？ どうせお袋、余分に作ってるだろうし」

「いや、いいって、ほんとに」

広げた両手を顔の前でふるふるさせる未来の手元から、白いものが落ちた。未来が慌てて屈むよりはやく、公志の手が不審をあらわに拾い上げる。生ぬるい中にひんやりした柔らかい感触に、公志は眉をひそめた。

「保冷剤？」

「あ、うん。ちょっとね」

思い当たり、公志は未来の腕をつかむと袖を捲り上げた。手首の脇が一筋、赤くなっている。

「何やってんだ？ 火傷は、流水で冷やすのが一番なんだぞ」

「もう、やったよ。その上で、保冷剤当ててたの」

決まり悪そうに腕を引く未来に、公志はあきれた。

「痛そ」

「そんなこともないよ」

「今度の週末、大丈夫かよ」

「これくらい平気よ。部内試合じゃない。リストバンドで隠れるし」

「甘くみるなよ。来年度のレギュラー選考なんだから」

保冷剤をかざし、再度腕をとらえると、未来は素直に従った。袖に押しやられた緩んだバンダナを解き、赤くなった部分へ保冷剤をまきつけるように当てるときつめに縛ってやる。

「んじゃ、明日」

「あれ？ 公志、ちゃんと学校行くんだ？」

「行くよ。バカ」

ぷいと顔をそらし、公志はドアノブに手をかけた。思い出して振り返り、

「女子高生一人なんだからな。鍵、かけとけよ」

「あ、やだ、お父さんったら。かけて出て、って言ったのに」

「人任せじゃなくてさ。確認しろよ」

世話が焼ける。心でつぶやき、公志は軽く手を上げて扉を閉めた。いまだに、部活だろうとクラスでも、昔ながらに公志、と呼ぶ未来の声が、耳の奥にほんのり残っている。

いつから自分は、名前で呼ばずに、とっさのときでも佐倉と呼ぶようになったのだろう。

大量のチョコが入った紙袋を提げ、公志は重いため息を吐きだした。

恋人たちの祭典当日に休む「主役」にも呆れるが、なんのかんの言っって言付けを断り切れなかった自分へも、灰色の気持ちを抱えていた。

こじやれた家が並ぶ閑静な住宅街の一角に 目的の表札を探し当たたが、どの窓も暗く、冬の夕暮れに沈んでいた。

門柱にもたれ、ケータイのアドレス帳から瀬尾の番号を指定する。

数回のコールの後に、ざわついた騒音と瀬尾のかすれた声が答えた。

「ひどい声だな」

顔をしかめる公志に、軽く咳をして瀬尾が弱く笑う。

『ちょっと、ね。今病院なんだけど、何？』

むす、と顔をつぶし、公志は紙袋を持ち上げた。

「テニス部その他の女性ファンから預かったチョコをお届けにあがりましたが、いかがなさいますよう、王子様」

『やめてくれよ』

楽しそうに笑いながら咳き込む瀬尾に、公志は袋を覗き込んだ。

ピンク、シックな赤、茶色。着飾った箱や包みが折り重なっている。

『悪いね。反対方向なのに届けてもらって。もう少ししたら帰れるからさ。玄関脇の倉庫にいれといてくれる？』

「玄関脇のお、倉庫。これか」

『僕の自転車の籠にでも』

がたぴしと音を立て、片手で扉を押し開けると、言われるように自転車がある。その横に、使い込んだラケットとボールがあるのに、公志は気がつかないふりをした。

「籠に、入りきるかな、これ」

『入らなかったら、正木君もらってってよ』

「だから、んなもん、要らないって」

バランスを考えて箱やら包みやらを載せると、そ、と扉を閉めた。瀬尾の声が笑う。嫌味な状況なのに、さりりとしている。熱で赤くなつたふんわり笑顔が目の前に浮かぶようで、公志は電話を持つたまま駅へ向かった。

「レギュラー、他のやつに取られたくなかったら、試合までにしっかり治せよ」

『うん。ありがとう。来年度も正木君と組めるように、がんばるよ』
「ああ」

通話を切って、公志は肩をまわした。重苦しい紙袋とおさらばできた開放感が、まだ行き渡らない。

瀬尾とのペアは、呼吸を合わせやすくして気に入っている。しかし、彼と組んでいる限り、公志は瀬尾の引き立て役になってしまうのか。来年度もこのペアで。それを、望んでいるようないなような。はつきりしない。

駅から、人のうねりが流れ出た。あぶあぶと滝をのぼる鯉の思いで流れをかきわけ、駅舎への階段を上りきったところで声をかけられた。

「お疲れ様」

見上げると、後ろに手を組んで壁にもたれる未来がいた。すつきりと膝をあらわにする制服のスカートの陰から、小さな紙袋がのぞいている。

状況を察し、公志は親指で来た方を示した。

「瀬尾のやつ、病院だって。もうすぐで戻るらしいよ」

「そう。大丈夫かなあ、週末」

背に回した袖が、不自然にひくひくしているのは、未来が反対の手でそでをいじくりまわしているためだろう。

通り過ぎようとして、公志は足を止めた。

「家、わかんないのか？　なんだったら、案内しようか？」

「え？」

「瀬尾に渡すんだろ？」

紙袋を指差すと、頬を染めてうつむいた未来が口の中でごによごによ分からないことを呟く。すきつとしない、いつもらしくない未来に、公志の胸はざわめいた。さりげなく、電車の時間を確認するふりをして改札へ向かう。

定期券の使える駅までの切符を買いに券売機の前へ立つと、隣へ未来が並んだ。うつむき加減でぼつりぼつりと小銭をいれる姿に、公志は戸惑った。

「ま、辛いわな」

じゃらりとこぼれ落ちるつり銭をわしづかみにし、財布へ放り込みながら公志は言葉をさがした。

「あいつにとっては、選り取りみどりだし。けどよ。最初からあきらめるなんて、らしくないじゃん」

機械から吐き出された切符を引き出し、財布に入れてかけて手を止める。

未来は、真っ赤にした顔を横に振った。

ホームへ、電車が滑り込む。駆け足になる人の流れにのって、公志も改札へ向かった。振り返ると、未来もぴたりと後についてくる。公志は他の人の邪魔にならないよう、気をつけて脇へ身をひいた。

「渡すだけ、渡して来いよ。昨日作ってたの、それなんだろう」

言い当てられたのか、未来の顔は首まで真っ赤になった。怒ったようにかっと見開いた目が、まっすぐ公志を見上げる。発車の笛が鳴った。

「もらってくれる？」

ずい、と差し出された紙袋に、公志はたじろいだ。しゅ、と息を吐き、電車がモーターを回す。リズムを刻んで走り去ったあとのホームには、どこからか鳩が舞い降りた。

「いらないって」

公志の目に、鋭い光が走った。

「なんだと思ってたんだよ。いくら幼馴染だったって、振られチョコなんか」

「違うって！」

未来が、一度引いた手を再度公志の胸に突き出した。どん、と拳があたる。

「公志に作ってたの！」

反動で揺れる紙袋が、こつ、とブレザーに当たった。公志は魂が抜けた顔で、未来の頭を見下ろした。

「へ？」

「嘘だと思ったら、中、見てよ」

自ら紙袋に手をつっ込み、紙で包んだだけの箱を取り出す未来に気押されて、公志は包みを開いた。

紙箱にレースペーパーが敷かれた中に並んでいるのは、懐かしい香りのする焼き菓子だった。にらみつけるような眼差しに恐れをなして、周囲の視線も意識しながら公志は一切れを口の中に入れる。やっぱり、と思う。チョコの香りが広がり、ほのかに甘酸っぱいレーズンがこぼれる。香ばしく歯にあたるのは、胡桃ではなく、ピーナツだ。

「公志、ピーナツじゃないと駄目だもんね」
「うん」

認めて、公志は目をそらせた。

公志の母が、昔よく焼いてくれていたブラウニー。毎日のように遊びに行き来していた未来も、一緒に食べていた。

本来は胡桃を入れるが、安価だからという理由でピーナツを代用していた母だが、一度だけ奮発して胡桃を入れたことがある。ところが、公志は嫌がって、ピーナツじゃないと駄目だと、泣き喚いた。未来と公志が共有している思い出だ。

「ちょっと、苦い」

指先をなめる公志に、未来が顔をつぶしてそっぽを向く。

「ごめん。作り直しも焦がした。でもでも、今年は、食べられるシロモノでしょ？」

「ま、佐倉にしては、上出来」

言いつくろう公志に、未来がようやく笑った。どちらかといえばボーイッシュな顔立ちが、一瞬にして花のようになる。

「ね、公志」

箱を閉じ、包みなおしながら未来が歌うように言った。

「いつから、私のこと佐倉、って呼ぶようになったのかな」
「さあ」

紙袋を指にかけ、公志は改札へ切符を通した。未来も、続けて挿入する。

「でもさ、いまさらじゃないか？ もう、慣れたし」

「なんか、でも、昔みたいに呼んでもらいたいかな、なんて、思う」

けど」

未来の指が、肩にかけた鞆の持ち手をさまよう。空いている手でその指をとらえ、公志は自分の指をからめた。

「えっと、じゃあ」

期待のこもる視線をかわし、公志は電線にとまる鳩の尾羽を見上げる。

「ミク……ちゃん？」

「ちゃん、はちよっと」

ふきだし、未来の肩が公志の腕に寄り添った。

待機のため、公志は瀬尾とベンチに並んで腰掛けた。コートでは、フォーティ・ラブから追い上げる、白熱した試合が行われていた。先輩相手の部内試合とはいえ、真剣勝負だ。

「チョコ、わざわざありがとう」

休み明けの瀬尾が微笑んだ。ラケットの上でボールを転がし、公志はあいまいに笑い返す。

「あいかわらず、すごい数だったですね、王子様」

揶揄する公志に、瀬尾が手元をみやる。

「うーん。でも、一番もらいたかった人からは、なかったんだよね」

「へえ。城戸ちゃんからは、当然もらったんだろ？」

「まあね」

悪びれずいい、瀬尾は肩をすくめた。

「僕、城戸さんみたいなお嬢様オーラがでている人、苦手なんだ。もっと、家庭的な人が好みだから」

誰が目当てだったのかと探りながら、公志は軽く手首をこすった。赤いパイル地のリストバンドに目を留めた瀬尾が、顔を輝かせる。

「あ、それ、佐倉さんのと同じ。どこで買った？」

とっさに言葉につまり、公志はまじまじと瀬尾を見た。

「どこって。よくあるスポーツブランド物だし。親が勝手に買ってきたから、知らないけど。駅前じゃないかな」

「ほんと？ あ、今度行ってみよ」

うきうきとはしゃぐ瀬尾に、公志はひそかにリストバンドの端をつまんだ。バレンタインダーに互いのリストバンドを交換したことを、瀬尾には隠しておいたほうがよさそうだ。

コート中に歓声が沸き起こる。対戦者が握手を交わし、ベンチへ向かってきた。得点ボードが、0（ラブ）に戻される。

「次。正木公志、瀬尾理人」

監督の太い声が響く。仲間からの応援と共に、防球ネットの向こうにある女子用コートから黄色い歓声と熱い視線が降り注ぐ。

その大半が瀬尾に向けられる中、未来だけが公志を見ていた。

『瀬尾君が初心者なのに公志とペア組めたじゃない。私も頑張ったら、公志とミックス組めるかな、って思ったから、入部したんだよ』頬を膨らませながら、公志の手首にバンドをはめた未来の声が耳の奥に蘇る。

唇の端を引き上げると、公志は未来へ向けて軽く掲げたボールを、コートの端にバウンドさせた。

ホイッスルが緊迫した空気を引き裂く。

ふ、と息をぬき、公志は左に持ったボールを空へ上げる。膝を柔らかく曲げ、ラケットを握る右肘を背に引き寄せた。

未来のためだけに見せる、最高のサーブ。

小気味良い音をたて、ボールは相手コートへ吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9176q/>

0チョコ

2011年5月18日22時55分発行